

# 信 毎 歌 壇

## 小池 光 選

お揃いのコップに半分ずつ注ぐ明日が賞味期限の牛乳 (松本市) 点と弧の羽を授けぬ (安曇野市) 細川 恒スナックで煙草吸ふたびママさんがマッチ擦ってた昭和の時間 (長野市) 宮沢 信博夫亡くしひとり残され友は言ふ「犬を飼いたい側におきたい」 (長野市) 島田 怜子瓶ふれば精油のするると出てくる春になりにけるかも (長野市) 原田りえ子霜降りし畑の白菜一列に行儀よく並ぶ朝の目を溶 (長野市) 北沢 京子び 失敗を願ってしまふ醜さを吾に感じて五輪を觀たり (長野市) 山田登志夫雨降ればひときは強くにほひけるわが紫大のからだの不思議 (長野市) 原田 浩生番相は世界情報伝えし後写しておりぬ桜並木を (千曲市) 荒井よし子雪の溜滑る競技の恐ろしき我の膝までカクカクい (中野市) 増田きみ江たむ

佳作  
寒き握え我が子のように健気にも清らかに咲けるスミシの花よ (長野市) 樋口 寛子サイターの泡がゆくり消えるよう姫メタパはひそかに姿を消しぬ (長野市) 伊藤 恵子

選評

第一首、ごく平凡な日常風景のようだが、なにかしら暗示的である。賞味期限の明日に迫った牛乳を2人でわけて飲む夫婦。人生はそんなものかもしれない。第二首、スポーツには人を励ます力がある。このたびの冬季五輪のりくりゆうベアの演技などまさにそうだった。一枚の希望の羽だった。第三首、なつかしい。むかしのスナックはこうだった。いまはおちおち煙草も吸えぬ。

## 小島 なお 選

ストールを脱ぎたる技能実習生イラン攻撃始まり (飯山市) 市村紀久子でのち 畦に呼ぶおおいぬのふぐり父のモスクリーンのアウター袖 回まくる (池田町) 小口 美和外壁に「フィリピンパフ」と文字欠けて腐屋はあり春の風吹く (安曇野市) 堀部 明鬼やわらかき日差し背負いて本を読む君のまぶたのやさしく閉じる (信濃町) 吉沢 英夫低山を年金山と言う盛等流等混じりてチョコの交換 (佐久市) 赤岡 厚子購入のお茶のキャップを何人かで開けてもらいし待ち合ひ室で (麻績村) 市野瀬統子気になつてエンドロールで確かめるあの人の名がなかなかならない (長野市) 宮崎 昌嬉しきことあつて夕餉が食べられずこの興奮を伝える人なし (千曲市) 関 津和子歌らかに沈む感触心地良く枯草の中にしほし癒さる (辰野町) 矢島あさ子老いすすみ嵐の下が長くなるそれは自分にテレレ (松本市) 竹内 千波しだから

佳作  
静かなる待ち合ひ室で鳴り渡る時計の鐘このつ 「赤着るよ」(似合うと言われ買った服もつたたびたむ着ればよかった (長野市) 島田 怜子

選評

第一首、危機にある祖国を離れて働く彼女。ムスリムのヒジャブを脱いだ複雑な胸中を痛ましく思う。第二首、いつもの畦道に春が。ちいさな花の声に呼ばれた父もまた春の身体になってゆく。第三首、かつてそこで働いていた女性たちは今どうしているのか。春の幻のような追憶。第四首、君の背後から差し込む春の陽射し。そのあたたかく優しい重みが背に、まぶたに淡くもたれかかる。

## 米川 千嘉子 選

現実にマンガを超える棋士がいる戦争の無い世界にもできる (松本市) 美甘 歎孫三人高校卒業せる日なりお赤飯の香は一人居に満つ (佐久市) 伴野チツ子クービーを齧りさうなる赤ちやんをそつと抱き上げた実習生 (小諸市) 加藤 陽介いつまでも停戦ならず儼年をやさしく光るオリオン星座 (小諸市) 星野 直人浴槽に湧るるクモを助くるとも目の前の夫の痛みわからず (千曲市) 中村 美樹電車内黒で固めし新人はほつんほつんと諸の蓋なり (増玉草鶴ヶ島市) 由井 寛勇香き目に友持ちくれしお土産の「ガレのランブ」の笠に埃が (麻績村) 小山みよ子カンカン足場をたたむ人がいて立派なマンシヨんむき出しになる (大町市) 丸山めぐみ「パパとママはこんなに仲がいいんだから元に戻りな」と小二は思う (千曲市) 関 津和子手にとるを少しためらう「これ以上簡単にできぬ家(は)んしん」 (長野市) 原田りえ子

佳作  
「近所の灯りは徐々に運くなる怒の日は徐々に伸びるにつれて (伊那市) 赤羽 正彦ほのぼのとカタクリの花咲きいしが晩霜の今朝のおおいを見ず (宮田村) 小田切幸子

選評

第一首、将棋の藤井聡太、あるいは野球の大谷翔平のように、想像を超える平和への秘策やそれを実現できる人物が出るか。第二首、心から喜ぶ作者の心そのもののような香りだが、喜びを分かちあう人がいないのが淋しい。第三首、「クービーペンシル」のカラフルな優しさと実習生の細やかさの組み合わせがリアルで魅力的だ。第四首、はるか昔から続く人類の戦争史を星はどう見ているのか。